

特集3

『人』クローズアップ！3

— 三上 洋 (みかみ ひろし) さん —

今回は、7年前から大阪府豊中市にある岡町図書館で公務員として働いておられる全盲の三上さんにインタビューしました。

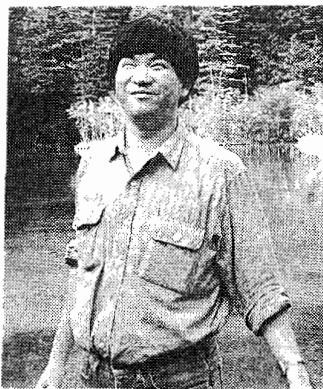
○公務員になる前は．．．○

17年前まで北海道に住んでいた三上さん、中学校卒業後盲学校へ進んだ。と、これだけ書いただけではそのまま読み流されそうですが、当時は普通科の高校へ全盲の人が行くことはなかったの、選択の余地なく盲学校へ進んだのでした。「決った道しか進めないのは嫌いな性格。物事なんでも選べないというのはいやだった。」と自分を分析しながら語られた。

そのような思いはあったものの当時はどうすることもできず、仕方なく盲学校へ進み、3年間マッサージ科へ通った。その後、針灸科は京都の盲学校へ通った。というのも中学の修学旅行で京都に来たときの印象がたいへんよかったからだそうだ。

卒業後、針・灸マッサージ師の免許を取得し、北海道へ戻った。北海道では針灸の仕事をしながらか昔からの”決まった道はイヤ”の考え方は、ふつふつと胸の中で燃え続けていた。

7年程した時、「外の世界を見てみよう」と思い立ち、北から南へ全国放浪の旅へと出かけた。マッサージのアルバイトをしながら半年間かけて沖縄まで行った。いろんな人にささえられながら旅した半年間の経験は、その後の三上さんにとって非常に貴重なものとなった。



<三上 洋さん>

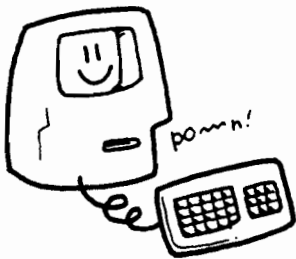
○公務員として働くきっかけ○

旅行の終点は、学生時代を過ごした京都。北海道に帰るつもりはなかったの、京都の病院でマッサージ師をしながら暮らしつつ、「どこかに就職口はないか？」と常にアンテナを張り巡らしていた。そんなとき、「脳性麻痺の人が豊中の市役所で働いている」という話を友人から聞き、その人を紹介された。何回か会っているうちに”自分も市役所で働

いてみたい”と思うようになった。また他にも何人か市役所で働きたいという人がおり、いっしょに市役所で働けるように活動を始めた。

十数年前は、公務員試験さえ障害者には認められていなかったの、まず試験をしてもらえるよう交渉することから始めた。そのうち、これらの活動と病院勤務の両立は非常に困難になったので、活動1本に専念することにした。これが可能だったのは同時期にご結婚されたから。しばらくは奥さんが働いて収入を得、生活は成り立っていたようだ。

「活動を始めた頃は何年もかかると思っていなかったが、実際には10年もかかってしまいました。」今から7年前、豊中市、枚方市、高槻市の行政が障害者の別枠採用試験を実施することになり、いろいろな障害をもつ者47名が受験した。このとき視覚障害者1名、内部障害者1名、肢体不自由1名の合計3名が合格し、その視覚障害者というのが三上さんだったわけです。（聴覚障害者の方は既に嘱託などで働かれており、このときの採用試験には聴障者は対象とされていなかった。）



この時、三上さんは38歳。公務員の一般は31歳、非現業は38歳が上限であり、この試験は三上さんにとって年齢的に最初で最後のチャンスだった。1回のチャンスを見事、自分のものにした三上さん！お話を伺いながら、すごいあとただただ圧倒されるばかりでした。

司書の資格は持っていなかったものの、図書館勤務を希望した。「実際、こちらからどんな仕事ができると具体的に行政に伝えないと、健常者では何が障害者にできるかわからないから。全盲と言っても、健常者がぱっと目をつぶって”何もできない”と思うのと、長年目をつぶって生活している人間では、同じ目が見えなくてもできることが全然違う。」三上さんに言われ、大きくうなずいてしまいました。ちょっと考えればわかりそうでも、言われなければなかなか気づかないのは私だけでしょうか？

○今、職場では...○

仕事の内容は、図書館にある点字図書の貸出や管理など。豊中市には市立図書館が3、4あるが、三上さんが勤務されている関係上、点字出版物はほとんど全て岡町図書館に集中している。

勤務し始めの頃は、「他の職員さんもやはり”目が見えないから何もできないのでは？”と、何かと特別扱いで、手助けしてくれていた。ところが、しばらくすると、どこをほっ

ておいていいか、どこに手助けが必要か、わかってくると他の職員も余計な心配をしなくなり、お互いに緊張がほぐれ、物を頼むのも逆に頼み易い環境になっていった。」

最近では職場でもコンピューターが普及してきており、点字ワープロを導入したことで墨字の原稿（起案）を自分で作れ！とされているそうだが、レイアウトが見えないことからこの仕事は躊躇しているらしい。

○今後の展開○

昨年、職場異動希望を届け出た。7年前に図書館に勤務して以来、全く移動がなかったからだ。職域開発ができていない証拠がここにもあるように感じた。今後、視覚障害者の公務員を増やすためには三上さんにいろいろな仕事に挑戦していただき、こんなこともできる、というような実績をさらに積み重ねていってほしいものだ。

三上さんの採用以来、途切れていた障害者の別枠採用試験が、昨年度から再開された。しかし、視覚障害者は対象からはずされていた。ここにも視覚障害者の仕事＝点字物の図式しか知らない行政の考え方をかいま見たような感じ。この公式の打破のためにも今後の三上さんのご活躍をより一層期待し、応援していきたい！

（文責：大和なでしこ）

